

みんなが民泊中の夜、オオコウモリを見ていたら6組副担のK先生に遭遇した。星を見に来たというのだ。なるほど、夜な夜な空を見上げていたのはぼくだけではなかったか。K先生は「星空」を、ぼくは「空飛ぶ獣」を、ちょっとばかし見る対象は違うけどまあ大差ないだろう（ということにしてくれ）。

1組担任のM先生や副担のS先生も合流しみんなで星を見ることに。生物、物理、数学の教員が一緒に星を眺めている訳だ。修学旅行でもないし普通こんなことはないの、なんか面白い。

ぼくら男性陣が、星空を何とか写真に収めようとカメラの設定をあれこれ試していた時、K先生は道に寝そべて静かにただじっと空を見ている。「カメラはやらないんですか?」と言ってみたら、「私は心に焼き付けたい派です」と返ってきて、これを聞いてぎくっとした。先日、4歳の息子と足立区生物園に行った時のことを思い出したのだ。子供用のカメラをあげてみたら、動物を1枚撮ったら次、撮ったら次……と、ただ撮る作業をこなすだけになってしまい、これはいかんと思ったばかりだった。

一方で、写真を撮る利点もある。今カメラにドハマリしているうちの奥さんがそうなのだが、「日の光の差し込み方が季節でこんなに変わるなんて今まで気づかなかった!」と新たな視点に感動していた。撮影を通じて、今まで素通りしていた景色や生き物にじっくり向き合うようになるのだ。これは生物のスケッチも似ていて、「スケッチめんどい」とよく生徒に言われるけど、描こうと思うと絶対に対象をじっくり見る。絵の上手さなんてどうでもよくて、この“対象にフォーカスしてよく見る”という行為が一番重要だと思っている。ただ、写真の難しいところは、うちの子のように撮影が“作業化”してしまったり、「写真撮っちゃえばあとでも見返せるから」といって実物をちゃんと見なくなることだ。またちょっと別の例だが、観察の授業の時、顕微鏡越しにスマホで写真を撮り、その「撮った画像」を見ながらスケッチをする生徒がいた。この場合はどうだろう?生物教員なら“あるある”の光景だが、生物のベテランのH先生とこのことを話題にしたとき、ぼくらは「これは良くない」という意見で一致した。H先生は「写真では大切な何かが失われる」と表現していた。この場合は、写真よりも生の感覚を大事にしてほしいということだ。K先生の星の見方がこれに当たる。実物が目の前にあるんだから実物を見て写真には写らない何かを感じ取る。写真や動画ならネットで見れるしね。

まとめると「一長一短だね」というとりとめのない話なのだが、こういったバランスって結構難しいし、ものを見るときに気をつけなきゃいけないポイントだとも思う。いずれにしても、じっくりしっかり観察するのが大事ってことだ。星の話からだいぶ逸れたが、K先生の一言でそんなことを思った。



西表島で見た「夏」の大三角形と天の川 7月22日



リュウキュウアオバズク 同じ夜、フクロウの仲間のリュウキュウアオバズクを見つけた。鳥の図鑑は写真より絵を採用することが多い。写真は光の当たり方で写り方が変わってしまうからだ。その分、絵は種の識別に重要な情報をしっかり描きこめる。



沖縄で見る「冬」の大三角形とダイヤモンド 1月15日

数学のK先生おすすめの場所（ホテルの目の前）で見上げたら、木々の間から冬のダイヤモンドが見えた。修学旅行期間は新月に近く、月明かりがほとんどなくて暗かったので、星がとても良く見えた。ちょうど木星もダイヤモンドの中に収まる位置にあってラッキーだった。空を見上げているとたまにオオコウモリが通過するの面白い。なお、冬のダイヤモンドは沖縄限定なわけではなく東京でも見られるので、よく晴れた日に空を見上げて探してみたい。冬は空気が澄んでいて星空観察に適している。